

---

月 刊

---

# MéLange

---

Vol.110

---



---

2016.02.28

詩と評論

---

月刊「Mélange」

Vol.110 2016.02.28

「月刊めらんじゅ」編集部

### 詩 & 俳句

連想ゲーム 9……………野口 裕 03

都市草紙 5 小さい市場の林檎みたいな……………木澤 豊 04

哭一雨 ………………有時秀記 05

句集粗稿 1 俳句)……………高橋雅城 06

川柳連作 御黒屋姫(川柳)……………情野千里 07

奴婢論 ………………高谷和幸 07

木曜病……………黒田ナオ 08

浮遊／冷笑 ………………中嶋康雄 09

くねり ………………大橋愛由等 10

マッドキャットは眠らない ………………中堂けいこ 11

violet poétique ① 雪 ………………月村 香 12

楽師…………… 富 哲世 14

### 案内

『画家の詩、詩人の絵 絵は詩のごとく、詩は絵のごとく』姫路シンポジウム 2016年3月21日……………13

### 連載エッセイ & 詩評

ひと言詩評 <13> ………………富 哲世 15

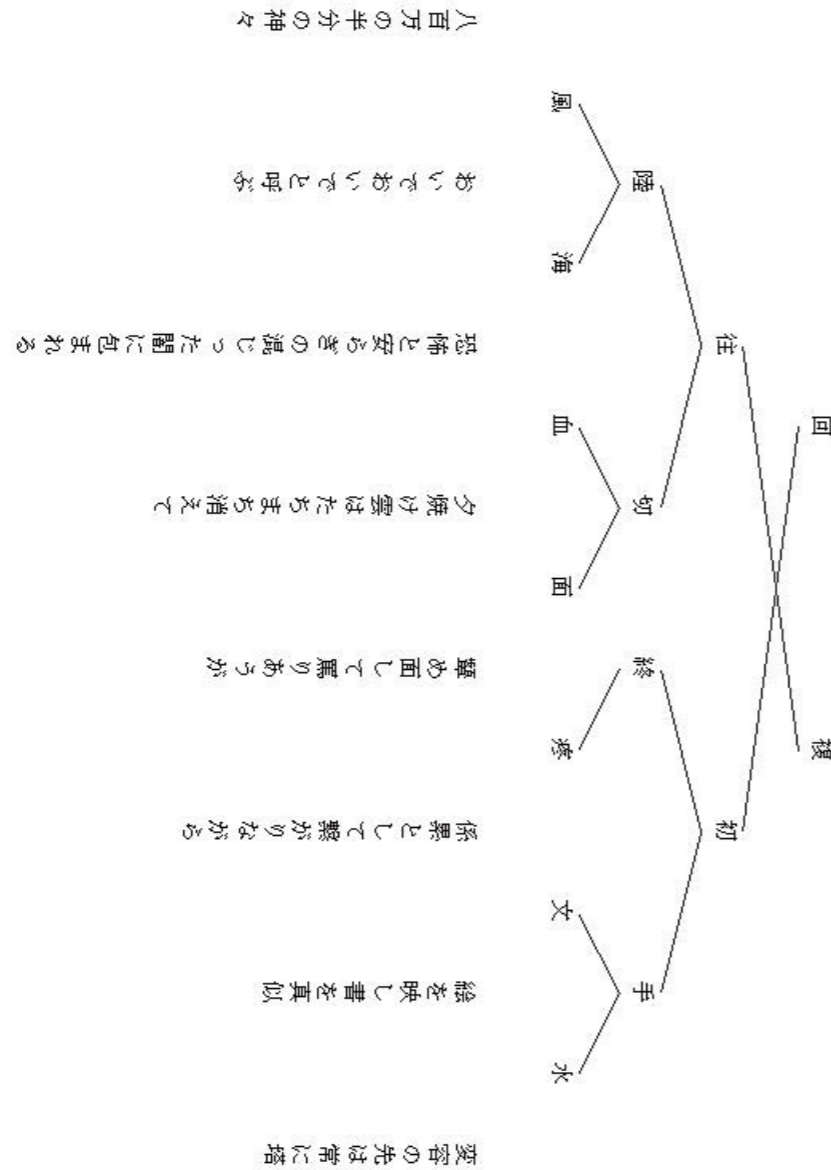
神戸詞あしび 97 「詩人哲学者と呼ばれた吉満義彦の生き方」……………大橋愛由等 20

### 読書会資料

詩人のための(?)カント入門……………北岡武司 18

編集部日より★31/月例会 110 回目の読書会は、哲学者で詩人の北岡武司さんに、「詩人のための(?)カント入門」を語ってもらった。その資料がよく出来ているので、掲載することにした。いまは大学教官を退いておられるので、これから哲学私塾のような形で、われわれ詩を書く人間に向けて語りを深めていってほしい。/奄美ふゆ旅行でもカトリック哲学者の吉満義彦に興味をいだいたように、2年前からカトリックなるものに関心を深めている。哲学書もさることながら、カトリック文学も読み進めている。手元にあった(正確には亡き父の書齋にあった)遠藤周作著「沈黙」から読み始め、つづいて「浦上四番崩れ」を扱った「女の一生 1部」を読了。いまは遠藤のカトリック作家であることの評論を読み進めている。(大橋記)

### ◆連想ゲーム 9



野口 裕

◆都市草紙5

小さい市場の  
林檎みたいな

木澤豊

浮遊する霧の粒を取り出し  
キリ　と　言う　と　霧が　発生する  
九月　ドアを開ける

ぼつ　と　蜚が胸に　あたった  
季節外れにおどろいたんじやない  
それが錯覚かもしれない　発見

平凡だが事実とは違う夢　なつか  
しいような　その

続く風景　悔恨か郷愁か　区別が  
ない

わたしは　わたしを欠席する

〈わたしという人に　ゆびを

さされる　わたしは　だれで  
しょう〉

こころは散文なのに　うたつてし  
まう

すでに　ことばになったわたし  
は　だれ　なのか　すでに　いな  
かったわたし

〈を　だれが見たのですか〉

わからないって　衝撃だ

いまはそれはちがうって言えない

静かに手を上げて目を空に向け  
たくさんの腕をあげて左右に振り

おどる

風の動作が　見たひとをさがして  
それを言うひとは　口をまるくひ  
らき

すでに　それだけが　あつたと

言うのは

死語だった

はるかに語られたのだと

〈内側をことばが横切つてい  
く　な〉

菜の花がざわつき　目覚めへい  
そぐ

わたしは　そこに　目覚めた　窓

の前で待つていると  
明るい影が来た

華麗で過剰な疾走だった　繰り返  
す繰り返し

ああ　わたしの皮膚が薄くなって  
きた

〈風が入ってきて　海や草の  
匂いがしみるからな〉

エンジンの振動を足のうらで読み

触先をゆっくり回す方角に

見えない弧を描く　こと　どこ

かの　一筋の境目がある

これは　わが体質なんじやないか

ふん　そうかもしれない

と腹の中でつぶやいたやつがいる

旅をするのは　会いたいわけな

く　逃げ出したいんだ

この世になかったものが　ほこり

つばい道ばたに落ちている

逃亡への欲望　切迫して  
じぶんを記号に変えたい

〈発したことばは　なにを望

んでいるんだろう〉

わかるといいんだが　うまく腰が  
かがめられない

うつくしいことばに囲まれて

引きとめるのは　もう遅い

ゆるゆるとそのものにひきよせられ

その場所に駅は見当たら　ない

開いたことのないドアだけある

壺の空はひろびろ　広がっていた  
そこで

波の反響に耳を澄ませて

うとうとするのは　いいこと

それ　かすかな通信　読んで　い  
いかな

わからないくらい　水面が　ゆが  
んでいるようだ

〈それは　萎びておいしい  
小さい市場の林檎みたいな  
静かな瞬間です〉

現物は別に　あるのに

◆哭―雨

有時　秀記

1

みずからの存立根拠がすべて崩壊したと  
おぼしい日に、哀れが雨を降らせはじめ  
る。しとしと、ざあざあ、と何日も、何か  
月も、何年も降り続く。現実と非現実の境  
は定かではなく、外界の雨と内界の雨がな  
いままになつた靄のような景色である。

わたしは沈黙し、日常を生きるため、食料  
品を詰め込んだ重い買い物ぶくろを独り、  
手に持つて帰る。手のひらに食いこむ袋の  
持ち手が非情な重さと痛みを感じさせる。  
どこへ帰るのか。慣習がわたしの足を歩ま  
せるのだが、突如降り出した集中豪雨のよ  
うな驟雨のなかで立ち止まる。自動販売機  
のある場所にヒサシがあり、そこで、しば  
し驟雨の止むのを待つ。

哀れが内心に奔めくこのときに、なぜ、こ  
の激しい雨が降るのか。手に食いこむ重い  
荷物とともに、道端のわずかなヒサシに雨  
を避けて思う。見放されたか、と。外界の  
雨の勢いに圧倒された意識は、しかし重力

に逆らつて、内心の核を持ちこたえようと  
する。

持ち手は重みに絶えながら、それと入れ替  
わりに、このとき身体から無用な汚穢が消  
える。地上に放たれた汚穢。その汚穢の「放  
たれ」とともに内心に垂下した賜物がある。  
重力にしたがい放たれた汚穢とは反対  
に、内心に垂下した賜物。この内心の賜物  
は軽い。名づけえぬ軽さが内心にズシリと  
くる。貴重な軽さが賜物にはある。

2

その雨から数年、しとしとと見えない雨は  
降りつづき、見えない雨の堆積を経て、さ  
らに追い討ちをかけるように見えない豪  
雨が降る。「アデュー」とも言えずに逝つて  
しまった肉の魂が旅立ちの日に降らせる  
豪雨か。天が哭す。肉が骨になる日に、内  
なる天が哭す。

魂の未知の旅立ちの印に、しとしと、ざあ  
ざあと降るこの「哭・雨」のなか、わたし  
は独りを極め、わたしにしか見えない祭り  
に参入する。汚穢が放たれたあの日に、内  
心に垂下した賜物の姿を見定めるために  
参入する。参入に備えるための数年の時が  
刻まれたからこそ、可能となる参入。内心  
に時の刻みがズシリと軽い感覚が沸く。そ

の「沸く」がもたらす参入の道は静かで透  
明感がある。

独りだけの祭りのなかで、わたしは見えな  
いものを見る。高原病院でのガン治療に通  
うさなか、霧が高原に湧いて、霧のなかで  
林の陰に隠れた湖水にかすかに見えるも  
の、あらかじめ冥府にいたわたしの影のよ  
うなもの。小鳥が霧のなか湖面の上と下を  
往還する。影は小鳥の往還する行路に付き  
従い、あるとき湖水の下に深く入り込み、  
息絶えたかのように沈む。小鳥は水鳥であ  
るが、水中に潜りこむとき、影と一体化す  
る。それは湖中の賜物に触れるために一体  
化するのだ。形のない賜物。まぎれもない  
賜物は、湖中深くにあつて形を持たない。

賜物に触れたとおぼしい参入の瞬間には  
稲妻が走り、内心のひらめきのように光が  
湖面を走る。その光は湖中から天に向けて  
か、天から湖中に向けてか、道を成して、形  
のない賜物をはこぶ。わたしの中でわたし  
は賜物を得るのだろうか。いや、わたしが  
無くなる寸前のあかつきに賜物は降る。重  
力に従つて放たれる汚穢は犠牲物である。  
この犠牲と引き換えに、重力に逆らつて、  
賜物は内なる心に降ってくる。そして、持  
ち手に食いこんだ痛みの幻視と引き換え  
に、形のない賜物は声を出さずらう。

◆句集粗稿 1

忌

アンパンマン

高橋雅城

妹

妹のアンクレットに夏来る  
妹の行く方知れず赤い羽根  
妹がポンポンダリアあんぽんたん  
蛇皮を脱ぐいもうとよ現れよ  
妹は大人になって雪女郎

長崎を消しゴムで消す原爆忌  
長崎に一夜の逢瀬原爆忌  
敗戦忌赤軍喰らう獣脂かな  
前衛は淫ら八月十五日  
もてあそぶブルトニウムの八・一五  
井戸水の温度終戦記念の日  
國燃えて残る寺山修司の忌  
燃え残る國のありかや寺山忌  
國という懸念建國記念の日  
塩からいカツ井喰らう啄木忌

アンパンマンマーチで届く初電話  
春愁の今日に泣く泣くアンパンマン  
焼酎をほおぼるアンパンマン飛んだ

七月六日

忘却のかなた机を洗う人  
いくさ経て洗われがたき机かな  
洗っても常世に残る机かな

◆川柳連作

御黒屋姫みくりやひめ

情野千里

◆奴婢論

高谷和幸

秘めうた百総かまごつせ 竈馬かまごまが百頭

のつぺらぼうの父君が居てくもがくれ 竈隠

八百年籠つて煤姫黒屋姫

水甕の水面に映るたそかれは

お竈さんから出て「蛇苺食べよ」

鼠の穴から肉襦袢が覗く

銅鑼が鳴るまで親不知子不知の舞

竈に棲んで聞くひとでなしの歌

※ 黒屋Ⅱ厨

バスがくもることがある 視覚の多くは 痕  
跡記憶がくもる この道のどこの 「した  
した した した」 つながる水路が虹彩を  
縮める あぶられて白色の薄いもの いつお  
まえになったのか 横たわる頬をつたい 着  
物の隙間にあつたもの 星と言うよりは奴婢  
と呼ぼう 被り物の多くは身を隠すことにあ  
つたから 馴じてしまう 名前のないもの同  
士が ここにあつた古い地の 記憶のさかい  
のにぶいかさ 「おまえ」なのか 息のつめた  
さを感じ くもるその場から道の十方に 出  
会い頭の羊頭の さまよう盲者となり 地は  
その指の世界で その声をまさぐる 臉を閉  
じた分断は 無名の名辞Ⅱ身体（アイコンのよ  
うに）を抱かれています バスがしるべ（痕跡）  
になるいま そこにいるのは おまえなのか

## ◆木曜病

黒田ナオ

にじんだ青の信号を渡って  
病院に行きました  
双子の看護婦が声を揃えて  
私の名前を呼んでいます

木曜病ですな

医者が言いました

光る魚を見ました

夢の中

そこでいつも目が覚めてしまうのです  
気がつく

夜中に何度も

鏡をのぞき込んでいます

雨がやんだら治るでしょう  
とは言うのだけれど

雨は毎日降り続いて

朝から晩まで降り続いて

部屋の中から

世界を満たし

私は喉のあたりまで

どっぷり浸かってしまいました

それでもまだまだ

やって来ない金曜日

薄暗いトンネルを歩いていました

背中までぐつしよりと

冷たい雨が染み込んで

よく滑る硬い線路を踏みしめながら

海月みたいに

傘をひろげて帰りました

## ◆浮遊

中嶋康雄

今年も露は生えるだろうか

露はだんだん少なくなる

露は踏まれて折れてゆく

葉は周囲から枯れてゆく

露の葉にくつつく

ちよつとしたつまらないものが

お手軽な支配を企む

笑う声が夜露を盗む

からすの糞でも飢餓よりはいい

からすの声でも静寂よりはいい

歩くそばから隣の人が消えてゆく

好きな人も嫌いな人も

どちらでもない人は少しだけ持ちがよい

つないだ手もつながない手も

影だけがひらひらしている

ひらひらの

ひらひらだけが埋め尽くす

増えるだけの思い出に

今年も露は生えるだろうか

増えるだけが良いことならば

露も増えればよいだろう

毒のあるものも

繊維だけのものも

よろける酔っぱらいのように

電車の走る方へ走る方へと

喜びが少しあればよいだろう

少しもないから救われぬ

無理がまだ無理を重ねる

終わらない

今年も露は生えるだろうか

皆ゲラゲラ笑う

今年ももつともつと薄くなる方位の浮遊

## ◆冷笑

中嶋康雄

丸い生き物が溝を走る

溝は泥で詰まり

雑草が毎年生え放題

梅雨時になると

つまらない虫がいろいろ湧く

畑も随分昔になくなり

水はどこにも行きようがなく

行き止まっていて

春先の草とところどころを

丸い生き物が走り

生臭さがやたら残り

腐った咳が出てしまう

もう埋めてしまおうと

家族で決めて造園業者に電話する

丸い生き物がさかんに溝を走る

生き物は丸いとしかしいようがなく

ただただ丸い

模様は見るたびに変わるし

足の数も一定ではない

目が合う

冷笑される

一瞬

溝には菖蒲が咲いた

最後は腰が曲がつて

丸くなったおばあちゃんが世話をした

おばあちゃんは百歳まで生きたが

亡くなって久しい

今も隅っこで菖蒲がわずか残っていて

青い花を咲かす

## ◆くねり

大橋愛由等

ここに佇っている  
うごくことはない  
ここからみえていた  
風はまっすぐ吹いてくる

ここへかえってくる  
鳥たちが知ってしよう

律儀に  
積みかさねられた  
矩形の

その色たちに  
反射したもの  
吸い取られたもの

ここにいたものたち  
ここにいるものたち  
の  
頬を射ち

たじろぎ  
おののき  
ためらい

の  
タームを  
蒐めること  
あらがうこと  
も

手をかじかませ  
口ごもらせ  
沈黙を強いた  
としても

ここに佇っている  
石はささやきつづける

ここからみえていた  
囲われていることの逼迫

ここへかえってくる  
カイエにだれが記そうとも

みることはなかった  
いや、みたものも  
かなしみに  
身のよじれに  
過呼吸に  
うちのめされ

頭を垂れ

歩き そして 歩き

四囲を 日々の雲たちを

見上げ

みえぬものを

拾い上げ

冬の乾いた樹皮を

そつと触る

むこうから  
やってきたものたちが

あらたな

むこうへ

むかうことを

歌ったものは

かえってくるのか

ここに佇っている  
手のぬくもりがほしい

ここからみえていた  
鈍色ばかりの景色なのに

ここへかえってくる  
眠りはいつまでつづくのか

光の声がよみとれない

## ◆マッドキャットは眠らない

中堂けいこ

凶暴な猫というわけではない。ただ、蛙族のなかで猫の顔付きを  
して生まれただけでそう呼ばれている。ときどき蛙の鳴きまねを  
してみる。なんとでもなるものだ。母は、いいのよ気にしなくて。  
あなたはちゃんと父さんの子だから。子猫みたいに可愛いんだか  
ら。なんで、マッドなの？ うん、眠れなかったからよ。母はそ  
うやっていつもm cの不眠症を猫のせいにしてしまう。

朝という実感が無い。陽が昇り、暮れるという一日は日捲りの一  
枚にすぎない。一枚の紙切れは時間の切れっぱしであった。長く  
て暗い夜はまんじりともせずベッドで横たわっていないければな  
らない。寝静まる家族の邪魔にならないように。せめて体を横に  
しなければ成長にさしさわる、という親の言いつけを守ってい  
る。兄はすつくと伸びた蛙顔で見下ろして、静かにしないと背が  
伸びないぞと脅した。

だからベッドで時間をつぶすのにありとあらゆる本やビデオ、ゲ  
ームや図鑑なんかを持ちこんだ。おかげで小さいくせにやたら物  
知りだった。だが不眠による影響は予測できないものだ。m cは  
夢をみるのではない。目覚める瞬間にフラッシュバックする、あ  
の甘い感覚、大草原を疾走するキリンの首に輪投げをしかけると  
か、乙姫のせつぷんを海辺の亀にゆずるとか、どうでもいいがど  
うしようもない幻覚を海馬をまたぎながら堪能するやすらかな  
安息。だがm cには知識や経験は本の背表紙にすぎない。読みの  
時間こそが背表紙の内容を写しとる、いわばコピーの集積にすぎ  
ないのだった。

マッドキャット・レイン！

土砂降りの雨の中をびとびとに体毛をぬらした子猫が走ってい  
く。

だれか救ってあげて、かわいい子猫よ。紙袋を腕にかかえて傘の  
下で女の子がつぶやく。だれか。だれか。

m cは目覚めたまま悪い夢をみたような気分になる。つぶやく女  
の子から紙袋を受け取らなくつちや。

マッドキャット・レイン！

レイン家の継子よ。おまえはにんじんのさ。赤毛のにんじんな  
のさ。夜中にトイレに行けない。尿瓶を母親に隠されるにんじん  
なのさ。

横書きの小説は卑猥だ。文字が右に進むと視界が字面をすべって  
しまう。縦書きは行間の余白が立ち上がり、真つ暗な廊下を突つ  
切ってトイレに行くことができる。小説の前身なんてみんな似た  
りよつたりだ。理解とはなんだろう。理解とはおのれの中で言語  
化できる仕組みのことを言っている。m cは自分が何ひとつ理解  
していない、海馬のさざなみを枕のふちに置いたままであること  
を了解する。

目覚めたままのm cは死について考える。雨の中、びとびとにぬ  
れた自分を救いあげた女の子の手の温もりを覚えていた。

マッドキャット・レイン！

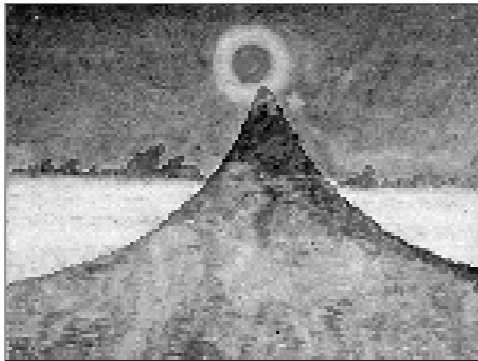
その紙袋を投げ捨てないで！ ルナルは母親を井戸に落っこ  
としたらしいけど、おまえはそんなことはしない。にんじんもし  
ない。だれもどこにも落っこちはしない。夜のふちにしっかりと  
かまっているんだよ！

# 『画家の詩、詩人の絵……』 絵は詩のごとく、詩は絵のごとく……』

2016年2月13日(土)～3月27日(日)・姫路市立美術館

西日本で唯一、姫路市立美術館で開催される『画家の詩、詩人の絵』展で、関西在住の詩人・美術家・学芸員たちによる応援イベントとして、詩と絵のシンポジウムを開きます。展覧会場での作品鑑賞後に六人のパネリストによる楽しい時間を共有したいと願っています。少し寄り道したい気分で、時間と空間を飛び越えた裏通りでの自由で闊達な議論と交流を楽しみませんか。

冊子  
進呈



宮沢賢治《日輪と山》制作年不詳  
林風舎蔵 ©林風舎

2016年3月21日(月・祝)

## 画家の詩、詩人の絵についてのシンポジウムをします

場所／姫路市立美術館 講堂

〒670-0012 姫路市本町 68-25 TEL.079-222-2288/FAX.079-222-2290

時間／14:40～16:40

パネリスト／京谷裕彰(詩人・批評家)／鼓直(スペイン語文学者)／時里二郎(詩人)／原田哲郎(美術家)  
高瀬晴之(姫路市立美術館)／未定(姫路文学館) 司会・大橋愛由等(詩人)

〈シンポジウムの前に13:00～14:30美術館を鑑賞します〉

※移動

◎納屋工房にて 17:30～19:30 交流会

〒670-0012 姫路市本町 68 番地 大手前第1ビル4階

参加費／3,000円(鑑賞券・シンポ・交流会含む)

主催／「主催・『画家の詩、詩人の絵』姫路展シンポジウム実行委員会 (事務局/エクリの会 079-447-3652 高谷方)

後援・姫路市、姫路市教育委員会、(公財)姫路市文化国際交流財団、(公財)兵庫県芸術文化協会、日本現代詩人会、兵庫県現代詩協会、(株)思潮社、(株)滯標、播磨灘詩話会、半どんの会、姫路美術協会、姫路地方文化団体連合協議会、姫路文学会、姫路文学会  
議、文学同人誌「播火」、句会亜流里、ルネッサンス・スクエア

協力／姫路文学館、図書出版まろうど社、納屋工房 シンポジウム協賛協力・姫路市立美術館

◆violet poétique ① 雪

月村香

雪をものにたとえるときはやゆきと言わないのがもどかしいのだ三歳の子がかあさんと目にした瞬間飛びついてくるその原始的遊戯をしてなぜわたしをかわすのだゆきとはあれのことだから原始はかあさんあれはなあにと問うのだ雪の降る日はしかしわたしにも日常の平易のちよこつと甘いやつがくつついてきたりする電車の座席があつたかいかいなどかあさんゆきふつてねるね手帳はもう長針がカチカチ言うのではなくいつの間にかずれてゆく短針を残すもう時間がないでもそれでいい背中の長いと言えばきりんと答えるその幼稚さが一杯の紅茶でその湯気がアラジンの夢の世界だバスがちようどすべり来てみんな同じように溶かした雪を燃やした風呂に入るのだゆきと交わるのだな

# ◆楽師

富哲世

杖をついた  
 くの字のかたちがいい  
 もう立てないで  
 じつと見据えているのも  
 でつぶりと腹に両腕を添えた  
 反った姿勢もとても  
 塗りこめられた晩鐘のような  
 耳鳴りのなか  
 音はとつくにきこえないが  
 ひだり肩に 小麦の精の頭蓋を載せた  
 目鼻立ちもまっすぐな立ち居も見事  
 そして奥行きを閉じ込める真つ赤な闇に封じられて  
 気がつけば頂きで溶け始めているのだ  
 猿の唇 あばら こめかみと古い写真のように  
 白髭の

山羊の頭を脱ぎながら

とがった鼻面の修道女アンジェリカが慎ましい眼を伏せながら  
 マリアの腕の ふくよかなおきな児の左手を  
 ベンタグラムの刻まれた分厚い書物で  
 淫らに挟もうとしているところだ  
 ろたろたろた と眩きながら  
 これらはみなゆきずり芝居の  
 判じ絵のいくつかの場面に見えて  
 間違いは  
 答え合わせのなかにある  
 ひとりきりでいても  
 みんな何かのペアだから  
 こうして鼠の花嫁の  
 夢物語をほどこいては壊していくんだ  
 どこまで行っても終わらない  
 ゴム工場の煤けた石堀  
 そうかもしれない  
 けれど消えてはあらわる  
 よたよた犬の蒼い散歩道  
 そう考えて  
 樹の瘤にすがりついて泣いた

# 富哲世 ひと言詩評 13

## 藤原安紀子 詩集「ア ナザ ミミクリ」

ロロロ ロア

ひとと 光りの棒が らせん

描く視書へ射した

水の葉たたきに埋まっている みつけ て

水仙の群れもまわり

つまれた標立ててこの (イヲ) は還ってくる ロロリホー

ロロリ

ーロロロ

うたう口になってぼくが踏む 口 になって散り  
 ねむる(イヲ)を連れて径を またきこし ア  
 やわらかい杖は曲がる こすり

あわせて笑う

ここえて不途 ロ ロ 音になり生まれてつたう

祝福する空も咳をして

リホー 目を 両手の凹みで運び

ようやく懐かしい 耳をなでて(ルカリテ)も奔りより

ロ ア ロ

つま突いて

こわれるまで抱いた ぼくも

記憶する骨屑がどこまでも延びるように

ひろげる

(イヲ)は

(詩集「ア ナザ ミミクリ」冒頭見開きページ)

〈ぼく〉はここであうたう者、風光とあざないあう者、抱き締める者、こへと記憶を跨ぎ越し、ともども連れゆく者となつて登場する。それは一方で強く思念をもとめ、このプロローグを過ぎて、イメージと融合したうたとして、意味の理路、物語の理路をあやうく不全と釣り合わせながら、「こわれた名詞」や構文、一語のなかでぶつかり合うシニフィエの多様さの中でときに片言的で、不明は不明のままに投げ出すように留め置かれる。その水路は消失や欠落への注視。「本質的な僅かな光を塗り残すために 視た いま。」余白や、無の在り方といった言外の歴史や体躯の記録を抱き込みながら、動詞の連鎖として可視化され浮き彫られていく、切り取られたエピソードの可塑性として引き受けられ、開かれ続けて行くが、その出来事の散種の容態のなかに、垣間見えるうたう主体の場所が維持されていくように見える。それはたとえ、新しく、懐かしい、まだ見ぬきみを準備するかのようだ

ぼくはいつかきみになる

それを忘れはしないから

外庭からつたつてくる囁りに

ときどきはかなしい かおをして  
いいよ



手紙にはそう書いておく  
きみの名まえを綴る 数なく残った  
チ カ ラ ハ、

(29—30頁)

これは誰への伝言なのだろう。すぐ側にいるようで先を見透かしても、振り返っても、きみの姿は見えないようだ。断念の抒情をかかえてどこかせつなく交感を求める感傷をも自己許容するこのポエジーの場所は、どこまでゆこうとするのか。

(…膨張しつづける語を束にしてころろなどというものを語れぬように 己の声で歌い光速で

ばくはしていくサンクチュアリで あそぼうよ

(15頁)

世界は、もう(ころろ)と言つて安心できないほど、再び頭らかな、盲目の意志でもあるのか。そうだとすれば、わたしたちはわたしたちを運ぶその原理構造に、どのように抗すればよいのか。もし(真実)というものがあるとすればそれは、壊れているということなのだから、「光速でばくはしていくサンクチュアリであそぼう」とは、ひとつの自己矛盾を生きようとする衝動であり、わたしたちに来ることは、衝動ゲームのように(あそぼうよ)、ということによって、本質を見透かす「真のひつじ」にパラドキシカルにまたがろうとして、(擬態「ミミクリ」)のテクストとしてのことばの身体性を示すことだろうか。ここにはかつて朔太郎が近代詩の「ころろ」を「感情」によって追放しようとしたように、現代のころろの追放が言われているのだろうか。いや、そうではなく、ここで語られようとするのは、ころろの塗り変えであつて、テキストの擬態は擬態としてもうひとつの他なる擬態、擬態としてしか語り得ぬ、他ならぬころろの擬態の必死さであるとも言えるのだ。語りえぬということとで鏡像的に言い表わされているかもしれない「きみ」へと、とどかぬ

心にまつすぐコミットしようとする擬態なのかもしれないのだ。ではこの不測の理路において、問答無用に親しげで間近な、「イヲ」「ルカリテ」とは何か?それは先ず、(かたち)であり(伝言)であり、ことばであり、そこに投げ出されてあるものである。

ひろがり

はやく間にあわない ぼくも 祖になるときみ (イヲ)は倒れてかさなる

影ぼうしは数とともにほら這つて、地上をもつれ駆ける 音 アくしゃみして

下敷きになる (ルカリテ)が弾けて跳ねて 来る き こえて

(10頁)

瞬間にしてやさしかった イヲ かたちだった (イヲ)  
ぼくたちは砕かれ 軀抱かれて捲き返す イヲ (イヲ)

(35頁)

こしつるかりて  
ひとがのぼるほらる  
なかにいるのだろう

(55頁)

最初に届いたのはルカリテの個室だ。  
うたつてごらん。

(58頁)

影であるとか、ぼくと、ぼくのきみとに仮託として交わされる愛称であるとか、あるいはインナーチャイルドやトーマスの呼称であるなどと想像されなくもない「イヲ」「ルカリテ」という記号それは結局は同一の記号の別名であるだろう)は、ぼくときみをぼくたちという関係性として成り立たせるための、化石、人が「間」的存在であるための触媒であ

る。あるいはそのことは自然も夢も経験を通じて森羅万象をおなじゅう混ぜ合うためのだれもその正体を知らない合言葉のようなものだと云つていいかもしれない。それは魔術の種であつて、道端の小石であろうが木の葉であろうが何でもよかつたのである。物語の最初から、実は「ぼく」とは「わたし」によってあなたと呼び掛けられるはずのぼくであり、きみとは、ぼくの夢の挿話のなかへわたしとして語り現れる者であるかもしれない。ぼくはわたしと語るることによってぼくであることを知り、わたしはぼくということとわたしとなる。「イヲ」「ルカリテ」によつてこそ「ぼく」「私」は仮構の往復書簡物語となり、世界性として不即不離の関係性となりうる。その魔法の「種」があつてこそ不可能性は可能性として起こりゆくすべては「ぼく」と「私」をめぐる「わたしたち」の出来事として語りうるのだ。このとき、一人称で語られる「ぼく」「私」とは「ことば」の擬人法であると言いつてもいいのではないだろうか。

ぼく、は流れ続ける途中として(「きみは石灰の線とともにうねり束となる運動を漕なくつづけ、光りの重さと釣りあつている。」)渴き、欲している。それはわたしたちが歴史的身体性という、わたしたちであり外部であるものから束ねられた者であるからだろう(「虹が円形になるのを見届ける老人が後ろ向きになり幼いからだを庇うように消えた。(…)ぼくらの母はみえなく落ちた葉の背骨をひとしく悲しみ、沈む光りがうごきだす空徑のようだった。」。わたし、はルカリテとともに、はるかに揺蕩う時空を生きる者であるように映る。求める先が、かつて失つたものであるのか、まだ見ぬなかであるのかを知らないまま、わたしをあなたに重ね合わせながら、その流動のなかで(ぼく)(わたし)は孤独でありながらもはや単独性ではありえない。

そこから、

イヲの月へ繰りなす(中性的に)三つ編みのぼくやルカリテの母が、最後の目とどけて歌うきみを書物にのこす。てを、あわせ大きさを挟み二把の、ほのつれの樹を抜けてみるぼくは永い葉とともにくつろぐ。(咲きに)、名をひらいた小鳥とパピルスと庭や森の音を、叩くゆびあとに(裂くれ待つ径はふき抜け、いつしか拍も増えていた。わたしはもう、葉に繁るルカリテがいなくとも明けて車輪を押し、降りつく白いきみの頬と

音の灰とともに、別の枝へとまるだろう。どんなときもぼくはいる。茫然と明えつづけるものとかさなり (二)頁)

どんなときもぼくはかさなりのなかにいる。イヲやルカリテや母やわたしやきみを跨いで、ここでは既知と未知が全体としてすつかり混在して姿を見せる。

(きみ)(あなた)という二人称は特殊な他者、他者の否定としての他者である。他者としての他者は外部性として訪れる何かであるが、きみ、あなた、お前…と呼び掛けられる他者、(わたし)によつて対幻想的、共犯性のうちへと困り込まれてしまう他者は、問主観性の闕の上にいる他者であり、(わたし)はその(きみ、あなた)の扉を開け閉めして外へ内へと出這いりする。内と外との闕の上で、わたしはわたしたちであり、そこでは、現象のこちら側とも向こう側とも言えるようなあり方で濡れ合うものたちが存在を存在する。(音のないうた)を見えるうたに変えるように。ほんとうの他者はイヲやルカリテなのかもしれない。

ある不到のことがらに対するように、ぼくがぼくである出来事はその都度の唯一性として(ぼくら)の上に次々に何度も何度も生じ来る出来事のたまたわりとしてなぞられるが、それは決定的にぼくがぼくあるいはぼくらに遅れをとる「今」としてなぞられる、自身への不到としての謎なのだ。このわたしという交流装置の原像であるものに、藤原は素直で忠実であろうとして、ぼくやわたしやきみ、「イヲ」「ルカリテ」「ラビ」…などという仮想の搭乗者を配置し、そこにぼくやわたしを出入りする無名の書き手というもうひとつの主体の直接性をも擬態しようとする。いづれにせよ、わたしという次元のなかでわたしたちは擬態で在ることから逃れられないのだから。と、古い、枯れた火にくぼみのうてなをかざしながら、呪術師は言う。

(しだいに何かの全貌であるあの小さな生き物はなだつたのだろう。)  
そこには途切れないうたの欲望がもえているのかもしれない。

(2013年1月 書肆山田)

『純粹理性批判』(A版1781、B版1787) 公刊に先立ち、カントは1770年に『感性界と叡知界との形式と諸原理』なる論文を著し、「69年という年は大いなる光を与えてくれた」とメモに書く。この照明に導かれ、「沈黙の10年」のあいだ、カントは『純粹理性批判』執筆に埋没する。70年論文タイトルにも表れているように、「感性界」と「叡知界」とを分けて考えることで、自然科学と形而上学との矛盾をアウフヘーベンし、学としての形而上学の基礎を確保しようとする。形而上学とは「神」、「自由」、「魂の不死」についてのアプリアリな命題からなるシステム(体系)である。70年論文以降、カントの批判哲学で一貫して踏襲されるのは、時間と空間についての驚くべきテーゼであり、これにより現象と「もの自体」とを分けること、感性界と叡知界とを分けること、後者のテリトリーで学としての形而上学を樹立することが可能になる。『純粹理性批判』から空間に関するごく一部の命題を読み、詩的な(?) 思いに耽ることができればと、お時間頂戴できれば幸いです。

カント哲学を一言でいえば、「現象」と「もの自体」との区別、これにもとづく感性界と叡知界との区別の主張にある。理論的なフィールドでは純粹理性は「仮象の論理」を産み出すだけで、むしろ実践の領野でこそ純粹理性が積極的に浮き彫りになる。さらに叡知界を存在の場とする「理性的存在者一般」の概念が確立されることになる。これは結局、「存在」をどう捉えるかというところへ収斂する。感性界から叡知界への「存在」の突き抜ける突破口は「超越論的感性論」で展開される時間空間論である。

そもそも時間は「どこに?」「いつ?」有るのか。この宇宙を包んでいる空間は「どこに?」「いつ?」有るのか。これを究明することで、魂の不死、自由、神も、叡知界というメタフィジカルな地平で思惟可能になろう。時間空間の本質究明は「存在」の問題と切り離せない。「存在」は、常識的にはこの世で(時空内で) 知覚されることで証明される。存在のエヴィデンスは感覚的データだということである。その前提となっているのが、時間空間は私たちを離れて、それ自体で存在するという考えである。ところが『純粹理性批判』は、時間も空間も「私たちのうち」「心」に具わった純粹直観であり、ともに表象

〈註〉

1 『純粹理性批判』のテーマ… 純粹理性を批判すること。「理性」↓さしあたり人間の理性。「純粹」↓経験的なもの(感覚的なもの)を混入しない、の謂(私たちの通常の理性使用は不純理性使用)。「批判」↓「分けること」、人間の認識能力を要素・原理(感性、悟性、理性)に分け、要素の権能、権限を見極める。根底の問い… 人間とは何か? (①私は何を知ることができるか? ②私は何をなすべきか? ③ 私は何を希望してもよいか?) — 『純粹理性批判』の課題… ①「私は何を知ることができるか」という問いの探求。第一版公刊まえ、1770年に『感性界と叡知界との形式と諸原理』公刊。(1770年~1781年は後に「沈黙の10年」といわれる)。「69年」という年は大いなる光を与えてくれた」というメモが遺されている。70年論文… ①『純粹理性批判』で展開される時間・空間論をほぼ先取り。② 感性界(現象界と叡知界)もの自体の世界とを「分ける」。「現象」…「目に見え、手で触れるもの」。「可感的 sensibilia なもの」の世界(感性界)「この宇宙」と「もの自体」の世界(叡知界)とを「分ける」のである。以上が、「大いなる光」に照らし出された現実の相貌。

2 たとえば「不在」absenceと「非在」non-existenceとの相違は何かと、常識的な地平で問うてみよう。「不在」とは、この世のどこかにいるが、その場にいらない、目の届く範囲にいらないこと。だが、「この世に〈存在する〉」が含意されている。「非在」non-existenceは、そもそも「この世にいらない」。だから私の誕生以前、私の死後は、私の「非在」non-existenceということになる。その反対が「存在」である。——この場合、生、命は、誕生から死への時間的現象である。その人物は、誕生から死にいたる時間「有る」、「私は有る」「彼〇彼女は有る」、「あなたは有る」。だが「存在する」とは? 感性界に見いだされることに限定されるのか。首を刎ねられたら、「私は有る」の持統は、無批判に排除? 首を刎ねられることで、時間的現象としての私の命は終わる。死を以て「私は有らぬ」ことになる。私の時間はそこまでである。この世を去っていった者の魂も、天使も、神も、神の国も「有らぬ」ことになるだろう。

3 「存在者」とはドイツ語で Wesen、ラテン語で ens、「有るもの」。(もの) Ding と同義。「現実的」は「可能的」「必然的」と区別。「可能的」は「そうかもしれない」、「それもありうる」の謂。必然的は「反対が不可能」の謂。「それ以外はありえない」。これらの表現の意味も、「存在」理解に応じて異なる。これはコギトの認識様態に関わる事柄である。「現実的」には「空想的」「幻想的」の概念も対置させられる。要するにイマジネールではないというのが「現実的」の謂でもある。今現に感覚を通して知覚されていることが「現

だと説く。

「・・・ところで空間と時間とは何なのか。これらは現実的な存在者か3。これらは〈もの〉の規定4にすぎないのか、もしくは関係5でもあるが、たとえ〈もの〉が直観されずとも、〈もの〉それ自体に属するような規定もしくは関係なのか、それとも直観の形式にのみ附着しているような、したがってまた私たちの心の主観的性質にのみ附着していて、これなくしては、この述語がいかなる〈もの〉にも付与されえないような、規定もしくは関係なのか。」(『純粹理性批判』「超越論的感性論第一節空間について」§2、A23, B27) —

ここでは「主観的」という概念に着目する。注意しなければならないが、「主観的」と「個人的」とは一線を画する。「主観的」とは、人間の心の中でつくられる、あるいは人間の心に見わっている、という事態にほかならない。「人間の立脚点から」というのと、ほぼ同義である。6. 時間空間は純粹直観であるにしても、それが主観的にすぎないのは、すべての自由の主体に通用するわけではないからである。つまり理性的存在者一般の制約ではないということである。

時間空間がカテゴリーとおなじように、主観が思惟し(コギト)、〈もの〉を捉えるための形式ならば、私たちは主観的形式に服したモードでしか、〈もの〉の相を認識できないことになる。自然科学は、その時代その時代の宇宙像を含め、そのような〈もの〉の相、あるいは関係、そこから構成される全体を認識する。それをカントは「現象」と呼び、現象と現象との関係、あるいは現象を素材に構成される世界を現象界、もしくは感性界と呼ぶ。だが現象(appearance)がある以上、現象するもの(what appears)が考えられねばならない。現象は現象するものの現象だからである。時空的に展開された〈もの〉は時空的に展開される以前の〈もの〉の現象なのである。その展開の場となるのが時間空間であり、その場で〈もの〉はコギトに照射される。現象する当の〈もの〉をカントは「〈もの〉自体」と呼ぶ。「〈もの〉自体」は時間空間の制約や因果律には服さない(因果律は時間制約下で妥当する)。人間は現象であると同時に「〈もの〉自体」でもある。そのような存在者として私は自由である。自由が私の本質的実在性であり、本質的述語である。「私は有る」は「〈もの〉自体」として叡知界に「有る」ということにほかならない。叡知界、〈もの〉自体の世界は自由の主体の客観的世界であり、それは道德法則という客観的法則を基礎にして展けてくる。人間は感性界に自らを見いだしながら、同時に理性的存在者一般の一員として自由の世界、叡知界に存在する7。

実的」のメルクマールである。——カントの念頭にあるのはニュートンの時間空間である。ニュートンでは時間空間は客観的な〈もの〉(Dasein)だと想定される。だが〈もの〉は空間内の対象として捉えられるが、空間を〈もの〉として捉えることはできないだろう。時間についても同じである。この世のあらゆる〈もの〉は時間内に有るものとして知覚される。が、時間の知覚はできない。また痛みや悲しみ苦悩は時間のなかで経験されるにしても、時間を〈もの〉として対象的に見たり触ったりはできない。

4 色、匂い、味、音、触感などは心の中で作られる。〈もの〉の主観的規定。デカルトでは、空間の広がり(もの)とは切り離せない規定である。objectの側に属するから objective である。又「いかなる〈もの〉、出来事にも始めと終わりがある」と私たちは確信をもつて言える。それは時間のなかのことである。時間的規定をもたない〈もの〉も、時間的規定のない痛みも悲しみも快樂も喜びもない。

5 関係とは、時間に関しては、先後、より前、より後といった〈もの〉の、あるいは表象の時間内での〈もの〉相互、あるいは表象相互の関係のこと。ライプニッツの「継起存在の秩序」。空間に関しては、上下、左右、手前、向こうといった前置詞で言い表されるような関係が考えられるライプニッツの「同時存在の秩序」。

6 『純粹理性批判』の別の箇所ではこんなふうにも言われている。「したがって私たちが空間や延長せるもの等々について語りうるのは、人間の立脚点からのみである。私たちは、主観的な制約の下のみ、どのように対象に触発されようとも、そのとおりに外的直観を獲得しうるわけであるが、主観的制約を離れば、空間の表象はなんの意味もない。この述語は、私たちに現象するかぎりでの、すなわち感性の対象であるかぎりでの、〈もの〉にのみ付与される。」B42.

7 人間は地面から生えてきたのか、天から落ちてきたのか。人間ならざる存在者といえは、通常思い浮かべるのは、アリンコやミツバチ、猫や犬、コウモリやクジラかもしれない。これらは皆、地面から生えてきて進化の歴史をたどった結果、今ある状態で地上にある。人間は所詮動物だという命題があたかもドグマのごとく私たちの頭にたたき込まれている。だが、人間は動物であるにしても、どこか感性界を突き抜けている。自由である。自由という超越論的述語は、理性的存在者一般の実在性である。所詮動物にすぎない人間が万物に君臨するのは、理性、知性の故にだとされるが、ひよつとしたら理性的存在者一般のなかで、人間は最低の存在者なのかかもしれない。

うた  
神戸詞あしび

99-2016.02.28 大橋愛由等



徳之島・亀津にある吉満義彦の銅像

詩人哲学者と呼ばれた  
吉満義彦の生き方

ものは、文学のみならず、現代においてはむしろ、神学であり、哲学なのではないかと吉満は書いている。P225  
吉満はことのほか詩のありようを重要視した。神学や哲学を成り立たせるものには「詩」がなくてはならないと考えたのである。若杉はこうも書く。「詩」は、義彦の思想を読み解く上で重要な鍵言語である。ただ、彼は詩を読むとき、いつも言葉の奥に「詩的精神」、すなわちポエジーを見る。詩は、可視的な「言葉」によって書かれることによって、不可視的なポエジーが存在することを明示する。P201

現在、確認されているだけの二篇の詩稿を遺した吉満義彦(1902-1940)は、詩人哲学者と呼ばれている。詩人と呼ばれるのは詩稿の数ではないことはわかっている。ではなぜこの吉満が詩人哲学者と呼ばれているのだろうか。『吉満義彦』(岩波書店、2015)の著作がある若杉英輔はこのように解析する。「吉満にとっての「詩」とは、形式としての詩文ではない。言い換えるなら文学的霊性とでも呼ぶべき働き」P203、「詩は論理においてのみ解析されるのではなく、それを照らし出すのは形而上の光である。詩の器になる

「詩」という書き言葉で構成されている表現には詩精がひそみ、その詩精こそが不可視な存在の根源をあらわにしてゆくのである。

「哲学がポエジーを失ったところに墮落が始まった。それは彼の哲学の底を流れている深い自覚であった。ポエジーは、言語的世界を超えて働く。絵画、音楽、彫刻、踊り、そして祈り、人の魂を真にふるえさせるものには、すべからずポエジーが偏在している。P200つまりは創造の根源的動因として、吉満は詩精を捉えていたのだととらえている。

そして、吉満は詩のありかを、詩を書くひとたちにむけてこう語りかけている。「わたくしは、このわたくしたちの今の時代に真実に苦しむことを知っている人、真実に時代の深淵からひとつのリアリティへのすばらしい通路を、この時代の感覚の内から見いだすことができる人が、現代の詩人でなければならぬと思います。」(「詩人の友に与える手紙より」)

生の根源者であつてこそ、詩人は詩人たりうるのだと言いつつ、い換えてもいいたろう。

これまでみてきたように、吉満は「詩」こそが、世界の根源を表出しようとする創造の器であり、詩を書くということは、ものごとの本質を言語化し、視覚化しようとする営為だと位置づけている。

奄美・徳之島出身の吉満は、カトリックの世界に生き、詩を語り、神学と哲学の研究を究めた人物である。一九四二年に開かれた「近代の超克」シンポジウムに神学者として参加していることでも知られている。「私は詩人を、あらゆる批評家中の最上の批評家とみなす。」と言つてはばからない。そうした発言の背景にあるのは、存在や言葉の持つ詩精の根源的なすがた。「霊性」を深く感受していたのに違いない。吉満は哲学と神学における「霊性」のありかを、井筒俊彦より先んじて唱えた人物であることも忘れてはならないだろう。

詩と評論  
月刊「Mélange」Vol.110  
神戸

2016年02月28日 通巻110号  
発行所/月刊「Mélange」編集部  
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通1-7-1 2F  
編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人)  
maroad66454@gmail.com  
定価600円(税込)